慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	追悼 生田正輝先生：惜別の辞
Sub Title	
Author	大石, 裕(Oishi, Yutaka)
Publisher	慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所
Publication year	2014
Jtitle	メディア・コミュニケーション：慶応義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 (Keio media communications research). No.64 (2014. 3) ,p.166- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20140300-0166

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

惜別の辞

大石　裕

生田正輝名誉教授・元新聞研究所長がご逝去されてから約2カ月経った，2012年7月2日，帝国ホテルで「偲ぶ会」が執り行われた。この会では，浜田純一東京大学総長，滝鼻貞雄元読売新聞社社長，鶴木眞元慶應義塾大学教授といった故人と縁のある方々が，生田先生のお人柄と業績をたたえ，お別れの言葉を述べた。その後，清家篤慶應義塾長の発声により献杯が行われた。会場には勲章を胸に誇らしげな先生の写真が飾られ，献花を行う人の列が長く続いた。先生を悼む，あるいは感謝する声が各所から聞かれ，最後に文子夫人から深甚なる謝辞が述べられ，「若き血」が流れるなかで散会となった。

生田先生の社会的な活動，それに対する高い評価は，「偲ぶ会」でのこうした言葉や新聞紙面などでかなり尽くされたと思うし，私自身『法学研究』の追悼論文集（86巻，7号：2013年7月）の「序文」で先生のいくつかの思い出を語らせていただいた。そこで，ここでは先生の研究を中心に述べることにしたい。

先の『法学研究』では，生田先生の研究業績が掲げられている。それを見ると，先生がマス・コミュニケーション論，ジャーナリズム論，コミュニケーション論，情報社会論といった，実に多様な領域において多くの著書や論文を発表し，さらには翻訳を手がけられていたことがわかる。対象としたメディアは，新聞，ラジオ，テレビ，映画，そしてニューメディアであり，扱ったテーマもメディアの倫理，言論の自由，世論（過程），オーディエンス，メディア産業，知識人や教育，時事新報などである。その際に拠って立った既存の研究分野も，政治学，社会学，社会心理学などきわめて多彩である。

このことは，生田先生がマス・コミュニケーション論など当該の研究分野において，まさに先駆者であったことを物語っている。それと同時に，学部や大学院時代に様々な研究領域の文献を渉猟されたことの証左とも言えよう。加えて，マス・コミュニケーション論という，言わば後発の研究領域を開拓し，根づかせるという仕事に生田先生がいかに傾注されていたかを示すものという評価も十分可能である。

生田先生がお話される場合には，「進歩的知識人」の言動に関しては批判的であったとの印象が残っている。それはおそらく，私だけではないだろう。しかし，上述の研究成果に触れると，そうした思いは底流にはあったかもしれないが，筆の運びがきわめて慎重であり，とくに先行研究を重視しながら論を進めていったことがわかる。研究の国際交流にも熱心であった。研究者としての先生は，研究の重要さを認識するとともに，その怖さ，難しさといった思いを終生持ち続けていたと言えるであろう。

それは研究以外の評論活動，たとえば産経新聞紙上に10年にもわたって執筆された「マスコミ論談」をまとめた，『新聞を斬る』（サンケイ出版），『新聞報道のあり方―その問題点を衝く』（慶應通信）を読んでも同様である。先生はこれらの本のなかで，型通りの批判に終始する新聞，そして他者に厳しく，自らに「甘い」新聞を問題視することに主眼を置いていた。そこで展開された主張は研究書よりも確かにいくぶんかは大胆ではあったが，いくつかの新聞を読み比べつつ，かつ新聞ジャーナリズムの問題の核心を衝こうとする姿勢は一貫していた。

今，メディア・コミュニケーション研究所を中心とする，慶應義塾のジャーナリズム研究が行うべき課題は，先生の問題意識を継承しつつ，ジャーナリズムがそうした報道を繰り返すことの事由に関して様々な角度から調査し，分析を行い，有益な知見を提示することであろう。もちろん，昨今の高度な情報通信技術の影響も考慮に入れながら。先生の訃報に接してから，約1年半の月日が流れた今，私はこうした思いを改めてかみしめている。

生田先生，長い間のご指導ありがとうございました。安らかにお眠りください。

（2013年12月3日）

大石　裕（慶應義塾大学法学部長，前メディア・コミュニケーション研究所長）